

1871年以降のカール・メンガー—主観的合理主義の基礎を求めて—  
Carl Menger after 1871: Quest for the ground of subjective rationality

京都大学 八木紀一郎

1. はじめに

1871年におけるメンガーの『国民経済学原理』の成立過程については、私自身かなりのことを明らかにできた（八木,2004 第2,3章）と思うし、また池田会員の研究（Ikeda,1997）では、それだけでなく背後にあるドイツ語圏経済思想との関連についても探求がおこなわれている。しかし、1871年以降のメンガーについては、まだ謎が多い。私は自分のオーストリア学派研究の最初の段階で、メンガー『原理』第2版の翻訳に携わりながらこの問題について考えはじめた。暫定的な考えを論文（八木,1979-1980）および訳書の解説（八木,1984）にし、それを改善して『オーストリア経済思想史研究』の第2章（八木,1998）に収録した。それから約20年が経過しているが、その時と比べて格段の進展があるわけではない。その間に私は、情熱的な社会主義者であった弟アントンの社会法学、シュモラーとの方法論争からマックス・ウェーバーにいたる歴史学派との関係についての論文を執筆し、『ウィーンのエconomic思想』（八木,2004）に収録したが、これらの論文はメンガーの思想を周囲の（重要な）学者との関係から探求したもので、メンガー自身の思索に内在したものではない。

私が1871年以降のメンガーの思索の中心的課題であったと考えているのは、副題にかかげたように「主観的合理主義の基礎」の探求である。『研究』第2章でそれについて論じるために私が用いたのは、一橋大学のメンガー文庫の資料と遺稿を取り入れて改訂された『国民経済学原理』第2版（Menger,1923）であった。その後、デューク大学のパーキンス・ライブラリーにカール・メンガー・ジュニアが保存していた父の遺稿類（メンガー文書）が寄贈され、研究者に公開された。私の初版『原理』形成過程やメンガーのジャーナリズムとの関連についての研究もこの資料に基づいたものである。それには、メンガー・ジュニアが『原理』第2版の改訂に用いた遺稿だけでなく、経済理論の基礎概念や方法論についての思索をかきとめた膨大なノートが含まれている。しかし、それらの大半は、執筆時期の特定も困難な断片的なメモであり、しかもほとんど判読不可能な走り書きである。もちろん、一橋大学メンガー文庫の『原理』著者手沢本（Menger,1961）に匹敵する手沢本への書き込みその他の比較的接近可能なものもあるから、時間と労力さえ厭わなければある程度の成果は得られるであ

ろう。しかし、いまのところは、私もこの資料の本格的利用は諦めたままである。

以上のような事情で、決して「新地平」と言えるような研究報告ではないが、今後のメンガー研究への期待もこめて私なりのメンガー像を描いてみたい。なお、(八木,2006)も参照されたい。

## 2. メンガーはなぜ方法論に向かったのか

『原理』を刊行したときにはその続巻を予定していたはずのメンガーが、なぜ方法論研究におもむいたかについては、『原理』への書評の内容とそれへのメンガーの反応が示唆を与える。

書評の中には歴史学派の立場からするものが2点あり、それらはメンガーが『原理』でおこなったような理論研究の意義を全面的に否定するものであった。その1つには、グスタフ・シュモラーのイニシアル (G. Sch.) が記されている。

「経済生活の心理学的基礎なるものは、国民ごと時代ごとに変化するものではないか。著者は、それにより、抽象的平均的人間の基本性向を絶対的に確実明白な量とみなして、それから経済生活を正確に導出できるというイギリス人の古ぼけた間違った虚構をうちたてているのではないか。自然科学が精密な探求をおこなってきたのは、秤や顕微鏡を用いてであるが、経済学においてそれに照応するのは、歴史的・統計的等の研究方向なのである。」(八木,1988: 47頁)

『原理』「序言」での方法論的文章に疑問をなげたのがハック (F. Hack) の書評である。

「たとえばわれわれは、欲望と物との間の因果連関なるものは、原因と結果の関係としてではなく、目的と手段の関係として把握すべきであると思う。また、経済的行為の法則が意思の自由といかに両立するかという周知の係争問題も、理論的な経済学がとりあつかうものは、経済行為にたいする実際的提案ではなく、人々が自分たちの欲望満足に向けて先行的に配慮して活動を展開する際の諸条件である、というだけで解決できるとは思わない。」(八木,1988: 44頁)

一橋大学のメンガー文庫に残されている著者手沢本の書き込みを見ると、第1章第2節のタイトル「財の因果連関について」は「財の目的論的連関について」に変更され、没後の第2版の第2章第3節のタイトル「人間の目的意識における財の連関について」に引き継がれている。さらに、この手沢本では、上に示したハックの引用第2

文のなかのメンガー「序言」から書き写された部分が、代替案なしに抹消されている。  
(Menger, 1961: S. 25)

『原理』は、「あらゆる物は因果の法則に支配されている。」(Menger, 1871: 訳3頁)という文章から開始されているように、人間の欲望満足をもたらすすべての経済現象が因果法則の支配下にあるとみなしている。しかし、『原理』の具体的な規定を見ていくなれば、客観的にみえる因果関係と二重映しになるようにして主観的な「認識」の世界が広がっている。「序言」には、経済学が対象とするものは行為そのものではなくその「諸条件」とであると書かれている。しかし、物が財となる条件、経済財となる条件、価値をもつ条件、交換が行われる条件等々のすべてに、当該の性質、数量関係の「認識」という条件が付け加わっている。たとえば物が財となるには、物に有用な性質があるだけでなく、それが行為者に認識されていることも必要であるとされるが、それは行為者の認識に入り込んで言えば、この物を欲望満足という目的に役立つ手段(財)とみなしていることに他ならない。そして、このことは行為にとっての外的な条件ではなく、意思決定ないし行為そのものの内容を示している。ハックの批評は、メンガーにこのことを気づかせ、「序言」で表明されている客観主義的な法則科学観の再検討を迫る効果があったものと思われる。

### 3. 『方法論』における「精密的研究方針」

『経済学の方法』は、メンガー自身が自覚していたように歴史学派に対する挑戦の書である。しかし、書評への対応でも見たように、メンガー自身の側でも自分の方法についての理解を再検討する必要がある。『方法』は、それを理論研究における「精密の方針」として定式化し、その権利を主張する書であった。

「経済人の、財貨欲求の充足をめざす努力のなかでの人間的利己の発現を精密的なやり方で追求し、われわれに理解させる理論こそ精密的経済学である。したがって、精密的経済学は、社会現象または人間現象、さらには通常『国民経済現象』とよばれる社会現象をさえも、一般的にかつ全体的にわれわれに理解させる課題をもつものではなく、ただ人間生活の特別な、もちろんもっとも重要な、経済的側面の理解だけをわれわれに与えるという課題をもつ理論なのである。」(Menger, 1883: 訳82頁)

メンガーの見解では、「精密的」な経済理論に対して、それが現実と合致しない、あるいは現実の多様性を無視していると批判するのは、基本的な誤解である。「利己のドグマ」だけでなく、「完全知識」、「外的強制の非存在」などが同様に、精密理論にとっ

ての非現実的な前提として存在し、それによって理論の一義的な展開が可能になっているのである。しかし、このような理解に従えば、現実の人々の行動や経済現象は、「精密的」な経済理論が想定するものと異なって当然ということになる。それでもなぜ「精密的」な経済理論を研究する価値があるのだろうか。メンガーは、人間行動の「経済的側面」は現実の全体ではないが現実の重要な一部分であり、「精密的経済学」はその側面が純粋に発現したらどうなるか人々に示すものであるということであろう。このことをメンガーは、「精密的経済学」が教えるものは、現実の現象の「法則」ではなく、「経済性の法則」(Menger, 1883: 訳 64 頁)であると表現している。経済学の精密な理論は、現実の一側面しかとらええないが、倫理的側面・政治的側面を精密に理論化する倫理学や政治学と合わさるならば、現実の全体を示すことができるであろう。

メンガーは『方法』の第1編で、「精密的理論」を定式化して、理論と現実が直接に対応しないという歴史学派の批判を退けた。しかし、それだけでは攻撃に対する防御に過ぎない。『方法』の大胆さは、その第3編で、防御から攻撃に転じて、歴史学派の愛好する国民経済や歴史的な発展現象にまでその「精密的方針」を適用したことである。

「一部の社会形象の、『有機的起源』といったものが問題になりうるとすれば、それはただ、社会現象の一部がその創設をめざす共同意思(合意、実定的立法など)の結果であり、これに反して他の部分は本質的に個人的な諸目的の達成をめざす、人間の諸努力の無反省的な結果(こうした諸努力の意図されない合成果)であるという事情に関連しうるにすぎない。」(Menger, 1883: 訳 136 頁)

メンガーは、これは「精密的経済学」の方法と本質上同じものとする。これについては、「模倣」や「習慣」という要素が入る発展過程を「原子論的」あるいは「精密的」と言えるのかどうか、あるいは、そもそも「販売力」の差が小さかったり、間接交換に伴う費用が高かったりするならば、貨幣が成立しない場合があるではないかという問題がある。たしかに、貨幣の成立論は、純粋な「原子論」および「完全情報」の世界での議論ではなく、諸個人の相互作用のなかで、個人の行動の条件自体がかわっていく進化的な過程を示すものである。その意味では、価格理論のように他の条件を一定として論じる理論とは異なっている。

#### 4. 主観主義的転回

『研究』では、経済行為の出発点と到達点、つまり一方における「需求 Bedarf」と「支配可能財数量」、他方における財需求の可能な限り完全な充足は、人間の恣意から

独立していると考えていた。しかし、一橋手沢本では、「直接的需求」も「直接支配可能財数量」も「直接に厳密に決定された量」ではないとみなす(Menger,1961: S.73)ようになり、改訂版『原理』ではそれらは「選択的に決定された量」(Menger,1923: 訳1:72-73頁)とみなされるようになる。

出発点は不確定状態（選択的決定 disjunktive Determination） → 「経済性の法則」

→ 経済合理性

「諸財を獲得営利する機会 *Erwerbsgelegenheit* は経済活動を行なう人々にとって、取得されるべき財そのものと等価であり、またとにかく一定の意義を彼らにたいして持つ」(Menger,1923: 訳1:45-6頁)。これは弟子ベーム＝バヴェルクの批判に抗して、需給関係だけから利子（資本用役の価格）の存在を擁護することにつながった。ベームは、財の価値は財がもたらしうる「用役給付」の価値の総体に他ならないとして、「資本用役」の概念を否定した。メンガーはこうした財論的な「資本」概念を否定して、「所得形成に投じられる貨幣額」という「資本の現実概念」を提唱した。いいかえれば、経済財論の行動論的変容が起きている。

他方、経済活動の多様性についての認識も深化した。1889年の論文「経済学の分類要綱」では、「経済現象の形態学 *Morphologie*」を提唱した。また、後に経済人類学者の Richard Thurnwald や Karl Polanyi や日本の玉野井芳郎に影響を与えた「人間の経済の二方向」論を残している。

カール・ジュニアは、父メンガーが財論の前に欲望論を置こうと考えていたことが、1890年代における生物学や生理学の研究の背景にあると推測している。彼は、『原理』第2版の刊行にあたって、父メンガーの遺稿のなかから編集した「欲望の理論」を『原理』第二版の冒頭章にした。しかし、この遺稿も、欲望の理論を経済学にとって基礎的な意義をもつものとしながら、合理的な経済学とむすびつく「真実の欲望」と実際の経済生活を動かす「臆見」「欲動」「欲情」の分裂を克服しえていない。この出発点が動揺するなら、メンガーの「精密的理論」は、その客観的根拠を失いかねないのである。

#### 【参照】

Ikeda, Y. 1997. *Die Entstehungsgeschichte der "Grundsätze" Carl Mengers*. St. Katharinen.

- Menger, C., 1871. *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Erster, Allgemeiner Teil.* Wien. →Menger, 1968-70, Bd. I. (安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社,1997)
- ……, 1883, *Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der Politischen Oekonomie insbesondere.* Leipzig. →Menger, 1968-70, Bd. II. (吉田昇三改訳『経済学の方法』日本経済評論社,1986)
- ……, 1888. "Zur Theorie des Kapitals." *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik* N. F. 17. →Menger, 1968-70, Bd. III.
- ……, 1889. "Grundzüge einer Klassifikation der Wirtschaftswissenschaften." *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik.* N.F. 19. →Menger, 1968-70, Bd.III.
- ……, 1923. *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 2. Al.* Aus dem Nachlaß hrsg. v. Karl Menger. Wien u. Leipzig. (八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎訳『一般理論経済学—遺稿による「経済学原理」第2版』1,2,みすず書房,1982-84)
- ……, 1961. *Carl Mengers Zusätze zu "Grundsätze der Volkswirtschaftslehre."* Bibliothek der Hitotsubashi Universität.
- ……, 1968-70. *Gesammelte Werke.* 4 Bde. Hrsg. v. F. A. v. Hayek. Tübingen.
- Menger, K. Jr., 1923. "Einleitung des Herausgebers." In Menger, 1923.
- 八木紀一郎, 1979-80. 「メンガーとヴェーバーにおける経済理論と経済人」『岡山大学経済学会雑誌』第11巻1,4号。
- ……, 1984. 「解説 メンガーの探求と『経済学原理』の改訂作業」(Menger,1923 訳書2)。
- ……, 1988. 『オーストリア経済思想史研究—中欧帝国と経済学者』名古屋大学出版会。
- ……, 2004. 『ウィーンの経済思想—メンガー兄弟から20世紀へ』ミネルヴァ書房。
- ……, 2006. 「カール・メンガー：精密理論と主観主義」同編『経済思想7 経済思想のドイツ的伝統』日本経済評論社所収。